

「お骨納め」に想う

本徳寺 大谷昭仁



十数年前に両親の骨拾いを経験した。日本の火葬技術は優秀で、大体の骨位置を保持したまま取り出すことができる。火葬場の職員が手慣れた作法で喉仏を取り出し骨の部位を丁寧に説明してくれた。私自身は遺骨にはあまり関心がないが、間違いなく人の最後はこうなるのだと見せつけられている感覚があった。

どうしようもない断絶の中で、残された者は、儒教の魂魄思想の影響か、無意識のうちに遺骨を故人の魂の依代とみる深層心理が顕現する。この性向を利用して偽宗教行為が存在するのも確かだ。

一方、焼骨となった遺骨は単なる物質だと割り切れないのも確かだ。生きていらっしゃるこちらに愛着が有る限り、無機の物体ではすまされない。いままで目の前にいた愛しい人の残影がちらつき、その変貌の過

『御坊さん』第26号
令和4年8月
発行 亀山本徳寺内・本徳寺廟所墓地管理部
姫路市亀山三三四・079-255-0242
編集 亀山本徳寺内・真宗文化研究室

激さに驚き、自分も行き着くところこうなるのかと、生死の無常を体験することになる。

昔はこの現実を機縁に、自らの生・老・病・死を自覚し、いのちの新しい再考に目覚めることが多かったが、死が隠され火葬が機械化された現代ではこんな仏縁はめっくに合つことはない。



本徳寺・亀山本坊での納骨式
遺骨は内陣全面中央の卓台上に安置され昔からの納骨作法によって一座の教法が厳修される。

遺骨の加工が流行り始めていることを知った。遺骨を造形物にしたり炭素成分をダイヤモンドにして指輪にしたり、常に身につけておけるペンダント形態を嗜好するようだ。他界の後も、自分に都合の良い関係を保ちたいのか、あるいは効験あるお守りや厄払いにするのだろうか。遺骨を日常生活で都合のよいアイテムとしてシンボル化する感覚はいかかなものか。

愛着の裏側は嫌悪である。生前疎遠であった親族は骨揚げ直後に、はやくも遺骨を封印する処理に動く。お墓をはじめ寺院や公共の納骨所に入れて、なにが

しかの供養を布施してけじめを付けたいということか。極端な場合は、電車の荷台に残したり、お寺に無断で放置することも有るようだ。

多くの人々は遺骨をしばらく手元に置いておくが、邪魔とはいわれないが、ついつい粗末に扱つことなるため、だんだんと負担感が出てくる。戦後「家」の解体が進み、核家族化してくるとお墓も仏壇もないため、遺骨の処理は切実なものになる。

このような状況を反映して、本山・本願寺では昔から大谷本廟をもつけ、総墓納骨の便宜をはかってきた。最近では、個別の納骨壇も経済合理性の観点から、お墓の代わりに利用される様になった。

本徳寺でも本山の本廟整備と同時期に西山廟所を開設し、有縁の寺院や門徒が納骨する様になった。現在も本坊と廟所で納骨式を執行している。本坊では播州一円からの納骨依頼が多く、廟所では近傍の在住者が過半を占める。近年の総納骨件数は年間一六〇〜一七〇件で推移しているが、前年度が二〇二一年度の少なかったため二〇二二年度は、一八〇件(本坊扱い一一五件・廟所扱い六五件)と多かった。納骨の総件数は以前とあまり変わらないが、明らかに墓じまいに伴う納骨が多くなっている。これは、少子化による家の継承問題、社会人口の移動、子孫への負担回避が関係している。

本来、骨事業はお寺の業務のごく一部ではないが、最近では墓じまいや後継者不在が要因で、どこのお寺でも遺骨が押し寄せており、その対応に追われているのが実情だ。

本徳寺もその渦中にある。今回は紙面を借りて、本徳寺の納骨の経緯と展望を試みようと思う。

浄土真宗の納骨文化



平野亀之助氏によって建立された本徳寺廟所の総墓。納骨塔には親鸞聖人の六字名号が刻まれ、この中に遺骨が収納されている。

真宗の遺骨の扱いは、基本的には宗祖親鸞聖人のお考えを踏まえて納骨されている。一言で言えば「娑婆ものは娑婆に還す」と言っていることだ。その根拠は、聖人の御晩年、常随のお弟子さんが、聖人の茶毘の後の処理をお伺いになったところ、「我がなきがらは鴨川の魚に喰わせよ」との仰せが常々であったと、覚如上人の改邪鈔に見聞できる。

誰しも、老・病・死を体験するが、真宗仏教では、厭離穢土・欣求浄土（信心の智慧により迷いの娑婆を捨て、浄土の悟りに至る）を宗旨としている。

身体は娑婆のものだから浄土に持って行くものではない。逝くときには、娑婆での地位・名誉・財産・人間関係・思想・信条全てを置いて逝くものだ。身体も全て捨てていく。その意味で、茶毘に附された白骨は娑婆大地に還すのが道理である。

従って、浄土真宗では亡骸である遺骨には手を合わせない、先人が旅立った浄土に向かって、手を合わせるのが残された遺族の姿である。

しかしながら近親の遺骨をそこかしこにばらまくことは出来きぬ由、しばらくはお寺の納骨堂やお墓の納骨室に収納して、年月をかけて土に返すのがしきたりとなっている。

本徳寺納骨の歴史の経緯



播州一円の真宗門徒に用意された納骨塔・1931年建立。四方吹き抜けの拝殿があり、納骨をされた方が本願の名号に対して、お焼香をして、帰依の念を顕す場。墓参の季節にはお香の煙が途切れることがない。中央には大谷尊由連枝による「俱会一処」の扁額がかけられており、その意味は、お念仏の功德により、信心の智慧を頂いた往生人が真実の浄土に生まれ、そこで、阿弥陀仏の教化によって必ず同じ悟りを得ることを言う。決して、遺骨が集って一緒に会おうと言う意味ではありません。（本徳寺廟所）

さて、本徳寺への納骨の歴史は古く、一六八一年に第八代・寂圓連枝によって本徳寺歴代の墓所として廟所が開設された。廟所の形態は参拝するための廟堂と遺骨を捨骨する墳墓から成り立っている。阿弥陀仏を御安置してある廟堂が参り墓、骨を収納した墓を捨て墓と言う。その呼び名から推測できるように、お墓参りで手を合わせるのは廟堂なのだ。

廟所の開設以来、廟堂を中心に本徳寺の有縁末寺の墳墓が営まれて来た。その後、江戸中期、元禄あたりから、本徳寺末寺の有力檀徒が一堂の墳墓を営むようになる。江戸期を通して、納骨者の範囲は徐々に広まり、近郷の真宗門徒の納骨が行われるようになった。

一方、龜山本坊のほうでは、江戸の末期から明治にかけて、少数ではあるが納骨が始まり、本堂内陣で納骨式をし、遺骨は一時、寺内に保管され、最終的には廟堂の総墓に埋葬されるようになった。この

伝統的習慣は今も続けられており、現在では播州一円からの納骨も多く、年間に百件ほどになっている。廟所の納骨堂は古いものがあつたが、その後焼失、一九三一年に、平野亀之助氏の発願によって、本格的な名号塔式の総墓が建てられた。この納骨堂の完成以後、近傍の真宗門徒が京都本願寺に分骨する代わりにもここに納骨するようになった。

本坊納骨の遺骨も最後はここに葬られる。本徳寺での納骨作法は本願寺と同様の作法で行われていたと考えられる。

戦中戦後を通して、本坊への納骨受入れの増加に伴い、一時的な遺骨の安置場所として本堂裏などの既存の施設が利用されていた。

折りしも、一九八二年に、篤信の門徒・竹内キヌ工氏が発意して、勝如上人から頂いた本尊名号の安置所として、今の浄華堂が建立された。後述するように、ここが遺骨の一時置き場として利用されるようになった。

本徳寺納骨の現状

本徳寺で管理する遺骨の安置には、廟所墓地における個別墓納骨と総墓納骨があり、納骨式は龜山本坊と廟所の二箇所で行われる。本坊納骨では納骨堂で一時安置し、最終的には廟所の総墓（名号塔式納骨）で土に返す。

古来、本徳寺では、家の墓地を持ち墓石の下部に納骨室をもうけて遺骨を安置するのが一般的であった。一九七〇年代に始まった大家族制から核家族制への移行にもなつて、墓地の不足が顕在化し、本徳寺でも廟所墓地に新規の墓地を造成して対応してきた。

しかし、二〇一〇年代になると、墓地の維持管理、相続者への負担を考えて墓石の建立を躊躇される方が多くなつてきた。その他、家の相続が困難になつたり、住居地の移転などで既存の墓地が不用となるため、今までお使いのお墓を改葬される方が増えてきた。また、新宅で本家の墓に納骨が難しく、新た

に建墓するかしないかを決めかねていたり、墓じまいで取り出された遺骨や遺品の処理について、お困りの方が多くおられる。このような方々の多くは、遺骨を自宅に安置する床の間や仏壇もない為、世話になってお寺に相談して、一時的にあずかって貰うと言った状況が顕在化しつつある。

そのような門信徒の要求に対応するため、本徳寺では戦前からの本坊への納骨形態を踏まえて、寺内に納骨安置所を設置し、そこに一時的に遺骨をご安置し管理するという方法をとるに至った。しかし、将来、新しい個別墓地に納骨するにせよ、合葬墓に納骨するにせよ、いずれの場合も、最終的には本徳寺廟所の名号塔総墓に納骨することになる。

現在は、ここに本坊納骨の遺骨をお納めして、最終的には廟所で土に返す方法をとっている。尚、本坊の仮置き遺骨と廟所の無縁墓の改葬遺骨の収納場として、一九九一年に吉田吉松氏の懇念によって大型の新名号塔が建立され、将来に至る納骨の持続性を確保している。



1991年に吉田組会長・吉田吉松氏の発願により建立された総納骨所である。廟所の駐車場から直接お参りが出来るため便利である。六字名号は本徳寺代18世・教明院昭世連枝の直筆

浄華堂建立の趣意とその経緯

さて、浄華堂は当初勝如上人の真筆八字名号をご安置するために、お経堂の横に建立されたものである。その経緯は玉手出身の篤信家・竹内キヌ工氏が本



有徳門徒の懇念によって建立された勝如上人真筆の六字名号を御安置する浄華堂。戦前から営まれた播州一円からの納骨の収納所としても利用されている。

願寺勝如上人との交信を深めるなかで、地元の本徳寺の由緒を知り、上人から拝受した名号のご安置堂を本徳寺境内に建てたい旨を当時の住職・大谷昭世連枝に懇願した。

連枝はその意を尊重し、安置堂の名称を勝如上人に内願して、浄華堂と命名して頂き、その真筆をお堂の正面に上程することにした。

設計は建築家でもある法恩寺・真能義見住職に一人、独特の屋根の行基葺きの瓦屋根は、人間国宝である地元の瓦師・小林平一氏の無償協力を経て、二年の歳月をかけて建設された。

一九八〇年十一月に起工式を執り行い、翌年六月二十日には上棟式が実施された。落慶法要は、勝如上人の御親修により執り行われ、上人によって命名された扁額「浄華堂」が掲げられ、内陣中央には上人御染筆のご本尊が安置された。なお、浄華の由来はキヌ工氏の法名である。

本徳寺は以前から播州各地の門徒から古くなった本尊類の奉納が続いていた。また明治期より播州一円の真宗門徒が本山納骨に倣って本徳寺で納骨式を修業する習わしがあった。最終的には廟所総墓に埋葬されるが、それまでは、奉納された遺骨や法物の

たぐいは施設内の仮安置所に収納されていた。そのため維持管理が問題となっていた。

これらの事情を解決するため、勝如上人と施主キヌ工氏との承諾を得て、浄華堂をこれらの一時的な安置所として便宜的に使用することとなった。

それ以来、以前から続いていた門信徒からの法名や本尊の奉納をはじめ、本山納骨の一時的安置所として、今も有縁門徒の利用が盛んである。

普段は表の扉は施錠されているが、行事などの参拝の多いときには解錠され、お焼香の香煙が絶えない。

最近では、廟所の墓じまいや一代限りの遺骨の一時的安置所として、また仏壇じまいによる使われなくなった本尊類の安置場として利用の頻度が高まっている。

毎年、八月の燈籠会にはこの浄華堂で盛大な仏供養が修業されている。



浄華堂内部の様子
中央に勝如上人の名号が中央に御安置され、背後には、東播・西播の本願寺派寺院の門徒が納めた遺骨、古い本尊や法号が奉納されている。年に一度は盛大な供養法要が修業される。